

## (追) いちよう葉含有食品の末梢冷えに与える影響

申 曼珍、菅原聖嗣、速水耕介、金子いづる、石井有理、  
辻 智子  
(株)ファンケル・中央研究所

〔目的〕 冷えを自覚する女性を対象に、末梢血流改善作用のあるいちよう葉エキスを配合した食品の末梢冷えに与える影響をサーモグラフィ及び血流計を用いて検討した。

〔方法〕 冷えを自覚する女性10名（平均年齢 $26.1 \pm 3.1$ 歳）を対象に、いちよう葉エキス、ビタミンE、ビタミンC、セレンウムを配合したソフトカプセル状食品を摂取させた。その期間は1日2回、1回2カプセル、いちよう葉エキス量として120mgを2週間の連続摂取とした。調査項目は、摂取前後にアンケート形式による自覚症状、観察指標として手の体表温度及び末梢皮膚血流量を測定した。各々サーモグラフィとレーザー血流計を用い、左手の皮膚温度と血流量を測定した。測定は室温 $24.5 \pm 0.5^\circ\text{C}$ 、湿度40–45%の密閉部屋で行い、30分間室温に馴化後、前値および $15^\circ\text{C}$ の冷水に10秒間負荷後0分、5分、10分、15分、20分の値を測定し、摂取前後の変化を検討した。

〔成績〕 自覚症状に関するアンケート調査の結果、摂取前に最も強く感じていた手と足の冷えが摂取後に軽減された（Wilcoxon,  $P < 0.01$ ）。肩凝り及び顔や爪の血色も摂取前より改善されることを認めた（ $P < 0.05$ ）。背中、腰、腹部の冷え、疲れなど他の症状に関しては、変化を認めなかった。手の皮膚温度は、被験食品を摂取前より摂取2週間後は高値を示し、冷負荷直後の0分において、摂取前の $21.25 \pm 1.67^\circ\text{C}$ に対し、摂取後は $22.22 \pm 2.39^\circ\text{C}$ と高く、冷負荷後10分時点において、摂取前の $23.25 \pm 2.18^\circ\text{C}$ に対し、摂取後は $25.32 \pm 4.20^\circ\text{C}$ と高値であり、その差が有意であった（t検定,  $p < 0.05$ ）。末梢皮膚血流量は一分間隔の血流量最大反応値および血流量反応-時間曲線下の面積を表す積分値は摂取前後において、差を認めなかった。

〔結論〕 いちよう葉エキス含有する食品が冷えを自覚する女性の冷え症状の改善により影響をもたらす事が認められた。